

視覚障がい者ランナーと伴走者のマッチング課題に関する研究

－ 視覚障がい者ランナーに焦点をあてて －

平井達雄¹⁾, 前田博子²⁾, 竹下俊一²⁾

¹⁾社会福祉法人汰功樹会わくわくキッズ倶楽部

²⁾鹿屋体育大学

キーワード: 視覚障がい者ランナー, 伴走者, マッチング課題,

【要 旨】

先行研究では, ボランティアとその現場ニーズとのマッチングを対象とした研究がいくつか存在した. だが, 視覚障がい者ランナー(以下, Bランナー)と伴走者のマッチングを対象として, マッチング課題を明らかにした質的研究はほとんどみられなかった. そこで本研究は, ランナーを対象として伴走者のマッチング課題を明らかにすることを目的とした. A 伴走クラブに所属するランナー(n=6)に半構造化インタビューによる調査を行なった. M-GTA を用いて逐語化したデータを分析した. その結果, 以下の4点が明らかになった. ①伴走が定着化及び継続化されていない新人伴走者に, Bランナーが伴走者の必要性を伝える機会を作っていくこと. ②Bランナーが継続的にランニングできるように日々伴走者の人脈を広げていくこと. ③両者の走る目的や目標が少々異なっても, Bランナーが新人伴走者との人脈を広げようとする意識と行動が, 互いに一緒に走る機会を増やせるようになること. ④定期練習会で取り入れられている「シャッフル」というマッチング方法に, これらの課題を解決する可能性が見出された.

スポーツパフォーマンス研究, 12, 786-802, 2020 年, 受付日: 2020 年 9 月 1 日, 受理日: 2020 年 12 月 23 日

責任著者: 前田博子 鹿屋体育大学 〒891-2393 鹿屋市白水町 1 番地

E-mail: maeda@nifs-k.ac.jp

Problems matching visually impaired runners with guide runners and a proposed process for solving them

Tatsuo Hirai¹⁾, Yutaka Yoshitake²⁾, Hiroko Maeda²⁾, Shunichi Takeshita²⁾

¹⁾ Wakuwaku Kids Club

²⁾ National Institute of Fitness and Sports in Knaoya

Key words: visually impaired runners, guide runners, matching task

【Abstract】

Some studies have been published on problems that arise when attempting to match volunteer guides to visually impaired runners in relation to their on-site needs, but the present authors could find almost no published qualitative studies on problems involved when matching guides and visually impaired runners. The present study aimed to identify the task of matching running companions from runners' point of view. Semi-structured interviews were conducted with 6 visually impaired runners who were members of a guide runner club. A word-by-word analysis of the transcribed interviews using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) resulted in the following 4 points:

- (1) Visually impaired runners should explain the importance of their having an escort to new guide runners whose escorting has not stabilized or has not been continuous.
- (2) Visually impaired runners should expand their personal connections so that they will have guides available and thus can continue running.
- (3) Even though the objectives and goals are not the same for the two groups of runners, visually impaired runners' enthusiasm and action to expand their personal connections is likely to increase the chances of their running together with an escort.
- (4) A shuffle matching method which has been employed in regular practice meets may provide a possible answer for dealing with these problems.

I. 緒言

近年、ランニングブームの影響を受けて、ランニング人口が増加傾向(SSF 笹川, 2014)にある。それに伴い、マラソン大会が全国各地で年間を通して盛んに行われており、障がいのある人が参加できるマラソン大会も増えている。こうした大会側の視覚障がい者ランナーに対する姿勢の変化の先駆けとなった契機は、2002 年日本陸上競技連盟の競技規則改正により、視覚障害者が伴走者とともに陸連主催のマラソン大会等に参加可能となるなどの動きであった。2004 年以降、東京国際マラソンや大阪国際マラソンなどには視覚障害者がガイドランナー(=伴走者)とともに大会に出場している(藤田, 2013)。その流れが市民ランナーへ波及していった代表例として、「東京マラソン」や「大阪マラソン」などの都市型マラソン大会での障害者部門開設があげられる。これらの大会の特徴は、開催当初から切断、脳性麻痺、視覚障がいなどの部門が設けられていることである(川端, 2008)。一方で、視覚障がい者ランナー(以下、Bランナー。B=Blind=視覚障がい者)が主体となって出場するランニング大会も多数開催されている。その代表例は「京都視覚障害者マラソン大会」、「視覚障害者マラソン大会東京大会」である。他方で、視覚障がい者の部門を設けて開催される大会は「かすみがうらマラソン兼国際盲人マラソン」、「国際太平洋青島マラソン大会」、「那覇マラソン」及び「福知山マラソン」などがある(アキレスインターナショナルジャパン, 2016)。これらのマラソン大会は第一回の開催以来 15 年から 30 年という長い歴史を有する。2016 年にはリオ・パラリンピックフルマラソンで日本の女子 B ランナーが銀メダルを獲得し話題になった。さらに 2020 年東京パラリンピックが我が国で開催され、B ランナーは今後も注目される存在である。

視覚障がいのある人のランニングは競技やプレーをBランナーと晴眼者が共同する運動・スポーツとされ(山口編, 2004)、盲人(=視覚障がい者)ランナーは晴眼者(=伴走者)と輪にしたロープを一緒に握って走る競技である(香田, 2009; 香田, 2014; 平井, 2017)。従って、Bランナーには伴走者がいなければ「走りたいときに走れない」という現状がある(星野, 2008)。Bランナーが大会に参加するには、大会当日だけでなく日常的なランニング練習が必要となる。それを支援するために、関東、関西の首都圏をはじめ、全国各地に視覚障がいのある人と伴走者が一緒に走る練習会が定期的に実施されている(日本盲人マラソン協会, 2016)。また障がい者スポーツの認知の向上により、盲人マラソンなど視覚障がい者が行なっているスポーツについて理解が深まりつつあり、支援する人達も増加して徐々に活動の程度や幅が広がりつつある(香田, 2009)。Bランナーがマラソン大会に参加できる機会は増加の傾向を示している(湯川, 2009)。

視覚障がい者のスポーツ活動は目の代わりとなる晴眼者の支援が必要なことが多く、また、スポーツを気軽にやる、見て楽しむのも障がい者にとっては制約が多い(藤田, 2013)。そういった現状の中、伴走者はBランナーの練習時間・回数、走力、疲労度、身体状況等に応じて準備するため、その人数はBランナーの2倍から3倍が必要とされている(鈴木, 2012)。さらに、例えば伴走者の人数が増えたとしても、Bランナーが走りやすい伴走者を確保すること、反対に伴走者にとっても走力や体力面で負担の少ないBランナーと出会うこと(鈴木, 2012)といったマッチングの問題が存在する。この問題が、Bランナーが普段の練習で伴走者を確保することが大きな障害となっている(湯川, 2009)。Bランナーと伴走者が集まる練習会において、できる限り効率よくかつトラブルを少なくマッチングするためには、Bランナーと伴走者のマッチングを支援することが求められており、両者のマッチングに関する研究が急務とい

える。

B ランナーと伴走者のマッチング^{注1)}をする際に、まず両者がどのような目的でランニングするのかということが問題となる。B ランナーには「走りたい」、「体を動かしたい」という目的、伴走者には「伴走者は B ランナーとただ一緒に走るだけではなく、(B ランナーの)夢の実現のサポートもできる」という目的がある(星野, 2008)。つまり、目的が異なる B ランナーと伴走者だが、一緒に走ることを通して目的を共有できれば、互いに満足感や達成感が得られることになるだろう。例えば、競技志向の高いスピードを持つ B ランナーが全ての練習でスピード練習するばかりではなく、ゆっくりと走る練習をする日もある。その日には走力は低いがボランティア精神が旺盛な伴走すること自体が目的である伴走者もその B ランナーを伴走することができる(ランニング学会編, 2001)。このような場面では、伴走者の走力が十分でなくても両者が一緒にランニングする意欲が高まり、今後のランニングの継続に繋がっていくだろう。このようにマッチングに関する問題では、B ランナーと伴走者の走力や走る目的が異なっても両者が共に走れるように、マッチングの段階での配慮が必要となってくる。したがって、B ランナーと伴走者のマッチングに関する現状を把握し、その課題を明確にする必要がある。

ランニングにおける B ランナーと伴走者を対象とした研究には、伴走者の伴走動機に関する考察(鈴木, 2012)や B ランナーが伴走者を確保の現状を調査した研究(鈴木, 2013)などの量的研究は存在する。だが、B ランナーもしくは伴走者を扱い、それらのマッチングを取り上げた質的研究はほとんどみられない。よって、本研究の目的は、B ランナーと伴走者におけるマッチング課題を明らかにすることとした。特に、B ランナー側に焦点を当て、自分自身で伴走者を見つけ出す自主マッチングを行っている現状を中心に考察する。

II. 研究方法

1. 研究方法の検討

B ランナーと伴走者のマッチングに関する研究には、鈴木(2012)が見られるが、研究手法は量的研究である。一方で、鈴木(2006)は「個人の体験の意味」を問う場合、統計的理論を用いた仮説検証型の研究では多くの限界が予想されるとして、仮説生成型の質的研究の必要性を示唆している。従って、B ランナーと伴走者のマッチング課題を明らかにすることを目的とする本研究では、質的研究方法が適切であると考えた。

本研究は「グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)」(B.G.グレイザーら, 1996)を、より活用しやすいように修正、開発された「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach:M-GTA)」(木下, 2003)を用いた。この方法はデータに基づいて理論を作り出す質的研究方法であり、看護や介護の研究分野に M-GTA が用いられていることが多い。M-GTA の適合性については、①人間と人間が直接的にやりとりする社会相互作用に関わる研究であること、②領域としてはヒューマンサービス領域が適していること、③研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていることが条件として挙げられている(木下, 2003)。「B ランナーを対象とした伴走」はヒューマンサービスの領域であり、「マッチング課題を明らかにする」という目的はプロセス的性格である。よって本研究では M-GTA を分析枠組みとして採用した。

2. 調査対象

(1) 調査対象の選択

B ランナーが伴走者と走る機会には日本国内においても様々な形がある。大別すると、B ランナーは競技志向、楽しみ・健康志向に分けられる。競技志向には、日本選手権、世界選手権、パラリンピックを目指す B ランナーが該当する。その中でもトラックレースでは短距離走、長距離走がある。ロードレースでは、フルマラソン、ハーフマラソンがある。そのような B ランナーには、陸上競技のクラブチームに所属して専門的トレーニングを行ったり、競技経験のある伴走者と個人的に連絡を取りトレーニングを展開するケースが多い。一方で、楽しみ・健康志向を主とする B ランナーには、ロードレースやファンランがある一般の大会や視覚障がい者対象の大会に出場することが多い。この志向の B ランナーは、定期練習会を実施している伴走クラブに所属し、当日マッチングによって伴走者と一緒にランニングをするケースが主だっている。当日マッチングとは、B ランナーと伴走者が定期練習会場に集まったその場で両者のマッチングを行うことである。このようなケースは全国的に存在し、月1〜4回のペースで定期練習会を実施している伴走クラブが多々ある。定期練習会は、任意団体として代表者が練習会を主催するケース、視覚障がい者の都道府県団体がランニングクラブを設立しているケースがある(ランニング学会編, 2001)。本研究では、楽しみ・健康志向を主とする任意団体として定期練習会を実施している伴走クラブを対象とした。

(2) 調査対象の A 伴走クラブ

研究目的に基づき、東京で主立った活動をしている伴走クラブ 4 つから調査対象クラブを選定した。その選定にあたり、2013 年 8 月 4 日から 11 日の期間中に代表者もしくはクラブの中核を担う方を対象として、事前にインタビュー調査を行なった。以下4つの伴走クラブの概要を示す。

1983 年に盲人マラソン協会が最初に B ランナーの支援活動を始め、この活動を徐々に広げていった。1988 年には東京視覚障害者ランニングクラブ、1995 年にアキレスインターナショナルジャパンが活動を開始した。これら3クラブの活動開始時以来のマッチング方法は当日マッチングである。2005 年、4 つのクラブの最後に設立されたのが A 伴走クラブである。A 伴走クラブは当時では画期的な取り組みだった事前マッチングを毎週実施しており、これは全国でもあまり例をみないとされている(星野, 2008)。事前マッチングとは、B ランナーと伴走者が定期練習会までに参加表明をし、A 伴走クラブ代表者が事前に両者をマッチングすることである。そのマッチングの結果はメールで両者に通知され、両者が定期練習会に参加することとなる。

表1 視覚障がい者ランナー(=Bランナー)の伴走を実施している
4伴走クラブの活動状況一覧表

2013. 8. 11現在					
	インタビュー対象者	A伴走クラブ	B伴走クラブ	C伴走クラブ	D伴走クラブ
	ヒアリング実施日	2013年8月10日(土)	2013年8月11日(日)	2013年8月4日(日)	2013年8月6日(火)
クラブ 設立の 経緯	現在の代表者	O氏	M氏	S氏	I氏
	創始者	O氏	D氏	S氏	I氏
	クラブが組織化された契機・理由	O氏が伴走に関心があり個人的に実施。後日ある伴走クラブの練習会に参加し感動。レースでの初伴走が原体験となり、『A伴走クラブ』を設立した。	視覚障がいに限らず、知的障がい、肢体不自由、聴覚障害、視覚障害など、ユニバーサルな対応という点が、日本の創始者の考えと合致した。	「見えない人が走るのは危ない」という大会の対応に対抗するためには組織化が必要だった。	ランニングの自主練習の必要を感じた。様々なランニング大会に出場したい。
	クラブの設立年	2005年	1995年	1983年	1988年
	クラブの活動年数	8年	18年	30年	25年
	クラブの組織形態(法人格・任意など)	任意団体	任意団体	特定非営利活動法人	任意団体
会 員 数	会員の有無	あり	あり	あり	なし
	現在の活動者数及び登録者数	951名	約320名	約600名	不明
練 習 会	練習会の頻度	月4～5回	月3回	月1回	月1回
	練習会の日程	毎週土曜日 9:00～	第2・4・5日曜日 9:30～	第1日曜日 9:30～12:00頃	第3日曜日
	活動場所	Y公園	Y公園	Y公園	Y公園
マ ッ チ ン グ の 方 法	視覚障がい者ランナー・伴走者の募集方法	口コミ、ホームページメールによる申込(木曜日まで)	口コミ、ホームページ閲覧	自由参加	ホームページ閲覧 立川で開催する大会による報道
	視覚障がい者ランナー及び伴走者のマッチング方法	事前マッチング制 →自主マッチング制	当日マッチング制	当日マッチング制	当日マッチング制 (ベテラン伴走者が実施)

現在 A 伴走クラブには、4つのクラブの中でも最も多く B ランナーと伴走者が集まり、毎週 100 組前後がマッチングされ、ランニングを行なっている代表的なクラブである。本研究の調査対象は、B ランナーがランニングできる環境を毎週提供し、かつ事前マッチングを実施している A 伴走クラブとした。

A 伴走クラブは、現在、会員が急激に増えて、代表者による事前マッチングが困難となっており、よりよいマッチングを模索している。その結果、これまでの事前マッチングの困難さを解決するために、会員が自主的に事前マッチングを行う自主マッチングへとマッチング方法を移行している。自主マッチングとは、B ランナーと伴走者が A 伴走クラブ入会後から相互に広げた人脈をベースにして、定期練習会までに一緒に走る相手を決め、それを代表者に連絡し定期練習会に参加することである。また自主マッチングで伴走者が見つからなかった B ランナーに、当日任意に複数の伴走者と走り適切に組み合わせをつくるシャッフルとう方法も採り入れている。

(3) 調査対象者の募集方法

A 伴走クラブに所属する B ランナーと伴走者の合計 249 名(2013 年8月 10 日現在)に対して 2014 年 3 月にクラブ代表者に本調査の依頼を行なった。その結果 8 名の B ランナーから調査協力の申請があった。そのうち 2 名はランニングを始めて数ヶ月であり、被伴走経験も浅かったため調査対象から外した。よってランニング及び被伴走経験をある程度積んでいる 2 年以上の B ランナー6 名を調査対象者とした。調査対象の B ランナーは、ランニング経験、A 伴走クラブ入会年数、及び被伴走経験に関わらず、積極的に定期練習会に参加している。そして、マッチングに対して問題意識を常に持ち、事前マッチングと自主マッチングを経験しており、より良いマッチングにしようと考えている点が特徴的である。調査対象者の特性は表 2 に示している。

(4) 倫理的配慮

研究倫理遵守に関する誓約書を用いて、研究の趣旨と内容、プライバシーの確保、研究の参加は自由であること、データの取り扱いについて説明した。研究協力について、調査対象者本人の署名にて同意を得た。さらに、調査で得られたデータを研究目的で使用するについて、A 伴走クラブ代表者の了承を得た。

(5) データ収集方法

1) インタビュー調査の方法: 半構造化インタビュー(Flick, 2000a)を行なった。インタビューは、定期練習会会場、日本点字図書館、調査協力者の職場・自宅近辺のカフェにて、個別で行なった。回数は1回、時間は1人当たり 60 分～90 分とした。調査対象者の同意を得て、インタビュー内容を IC レコーダーに録音した。

2) インタビュー調査期間: 2014 年 3 月 6 日～12 日

3) インタビュー調査の項目:

① 動機に関する質問

- ・ランニングを始めた動機
- ・A 伴走クラブのランニング活動への参加動機
- ・A 伴走クラブでランニング活動を継続している動機

② 定期練習会におけるマッチング方法に関する質問

- ・A 伴走クラブ定期練習会におけるマッチングの手順
- ・マッチングの役割・機能
- ・マッチングのメリット
- ・マッチングにおいて重要視すること
- ・マッチング方法についての感想
- ・マッチングにおける課題
- ・継続意欲とマッチングの影響

表2 視覚障がい者ランナー(=B ランナー)の特性

分析名	年 齢 (歳)	性 別	ロープ		ランニング歴	A伴走クラブ 入会歴	練習頻度		年間 レース 出場 回数
			伴走者の位置	相手との間隔			通常期	レース前	
BR1	64	男	左	肘が当たる程度	42年	7年9ヶ月	3/週	3/週	10
BR2	44	女	左右可	ロープ長30cm	2年1ヶ月	2年1ヶ月	3/週	2/週	10
BR3	49	女	右	拳との距離20cm	5年6ヶ月	5年1ヶ月	3/月	4/月	7
BR4	55	女	左右可	拳との距離6cm	4年6ヶ月	6年7ヶ月	3/週	3/月	5
BR5	43	男	左	指1本分2cm	3年	2年2ヶ月	1/週	1/週	6
BR6	34	男	左	30cm	5年	3年1ヶ月	3/週	3/週	10
平均年齢	48.17								

2014年3月時点

Ⅲ. 分析方法

IC レコーダーに録音したデータから文字を起こして逐語録を作成した。質的研究方法で多く用いられているインタビュー調査の分析方法(水野ら, 2002; 水野ら, 2003; 木下, 2003)を参考に分析を行う。

具体的な分析手順を以下に示す。まず研究目的にそって分析テーマを「A 伴走クラブに所属する B ランナーと伴走者とのマッチング課題を明らかにするプロセス」と設定した。続いて, B ランナー1 人目の調査協力者の逐語化したインタビューデータに着目し, 今回の分析テーマに照らして重要と思われる文章あるいは段落に注目した。ここで分析ワークシートを用いて, 逐語化したインタビューデータを具体例(ヴァリエーション)欄に記入する(表 3 参照)。そして, B ランナー1 人目にとってどのような意味があるのかを考えながら概念に置き換える作業を行なった。類似した文章や段落が出てきた場合は, その意味を考え, すでに生成された概念名に組み込むか, 新たな概念名を生成した。次に B ランナー2 人目以下 6 人に対して同じ作業を行なった(①概念化)。

これらの作業の後, 概念間の関係性を検討し, 概念の意味にまとまりがあるものに分け, それらの意味を包括しているカテゴリー名を生成する(②概念の抽象化)。さらに, 各カテゴリー間の関係性を確認し, その関連図を作る(③仮説の生成)。その後, 概念やカテゴリーを比較, 検討しながらカテゴリーの修正を行なった(④カテゴリーの再検討)(図 1 参照)^{注2)}。

ただし, M-GTA には具体例(ヴァリエーション)が少ない概念は採用しないようにといったように, 本研究のような少数事例に基づく研究に適していない側面がある。そのため M-GTA を研究関心に応じて適宜修正しながら進める枠組みが必要となる。そうした機能を持つ SCQRM(西條, 2007; 西條, 2008)をメタ研究法として採用することによって, M-GTA の本質を活かし少数事例に基づく研究を進めた^{注3)}。

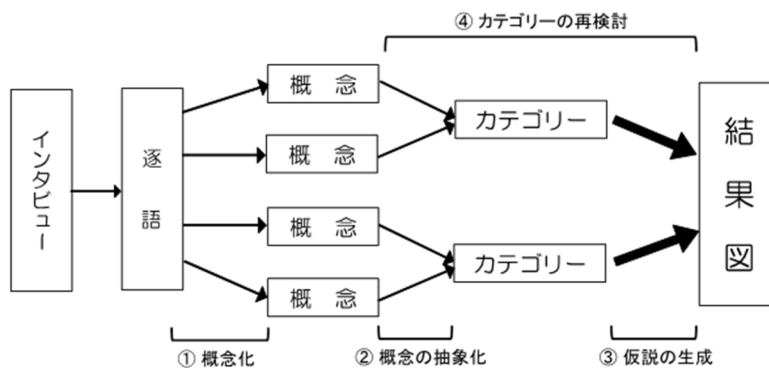


図1 分析の流れ(木下, 2003 を基に作成)

表3 分析ワークシート例(木下, 2003 を基に作成)

概念 5	伴走者と一緒に走ることにに対する感動
定 義	視覚障がい者ランナーが伴走者と一緒に走ると走ることができると感動したこと。
ヴァリエーション (具体例)	BR 1 : やっぱ、予めマッチングしてもらったというのが、すごく、なんていうかな、すごく走りに行くテンションが高くなりますよね。 (p.8) (旧保留概念 10 から統合, 2014.8.24)
	BR 5 : 伴走者という経験が初めてだったんですけど、伴走者さんがいると、こんなに走れるんだっていうのがすごいい、あの、驚きでした！ (p.2, 2014.7.16)
	BR 6 : で、とにかく走った後のその快感？ 終わったところの快感が、今までの経験にない、なんていうのかな？ 清々しさと、リフレッシュ感と。あとその、2人で同じものを、ロープ持って走るっていう感覚、今までなかったから。その新鮮さ、で、未だに継続しています。 (p.2, 2014.7.18)
	BR 7 : でも A 伴走クラブの人たち、特に A 伴走クラブの B 組さん、もしくは BD 組さんの方たちってのは、みんな底抜けに明るいですよ。…中略… けどそれでも、希望というほど大げさなものじゃないんですけど、安心感っていうか、ちょっとした心の拠り所にはなっています。 (p.5-6, 2014.7.18) ※B 組：視覚障がい者ランナー、BD 組：盲ろう者ランナー
理論的メモ	・伴走者と走ることにに対する感動には、ランニングを継続する意味が含まれる。BR 6 のデータがそれを裏付けている。 (2014.8.14)
	・BR 7 は感動と同時に、伴走クラブに対する安心感も語っている。BR 7 のデータは、概念名 5 より概念名 7 に該当する。実際に逐語化データでは、このデータの後半を概念名 7 として「安心感」としている。「感動」というよりは、「安心感」の方がこのデータにはフィットすると思う。 (2014.8.14)
	・既に約束されたマッチングがあると、視覚障がい者ランナーは気分が高揚するようである。それは事前マッチングが練習会場に行けば必ず走れるという重要な意味を持つからである。 (2014.8.15) (旧保留概念 10 から統合, 2014.8.24)
	・旧保留概念 10 から「感動」に該当するヴァリエーションを統合した。ヴァリエーションは少なめではあるが、保留概念 5 を概念化成立とする。 (2014.8.24)

IV. 結果と考察

1. 結果図の提示とストーリーライン

調査対象者 6 名にインタビュー調査を実施し、M-GTA をもとに分析を行なった(以下、概念を○○○ (=ゴシック体, 下線あり), 下位カテゴリーを〔 〕, 中位カテゴリーを《 》, カテゴリーグループを【 】で示す)。まず発言内容を文章ごとに分け、注目すべき発言を抽出した。抽出したデータにコーディングを行い、16 の概念を生成した。16 すべての概念のうち 5 概念が【B ランナーがマッチング及び伴走を通して得た経験】、11 概念が【A 伴走クラブの定期練習会におけるマッチング方法とその変化】という大きく 2 つのカテゴリーグループを導き出した。そのうち後者のカテゴリーグループの 7 つの概念間の関係性を検討し 2 つの下位カテゴリー〔自主マッチングにおける問題点〕, [自主マッチングにおける課題]を生成した。これら 2 つの下位カテゴリーは、中位カテゴリーの《自主マッチング》にあたる。また【A 伴走クラブの定期練習会におけるマッチング方法とその変化】の残りの 2 概念には中位カテゴリーの《事前マッチング》が付された。それらの概念及びカテゴリーを表 4 に示す。

表4 生成された視覚障がい者ランナー(=B ランナー)の概念
下位カテゴリー・中位カテゴリー・カテゴリーグループ一覧

概念名	〔下位カテゴリー〕	《中位カテゴリー》	【カテゴリーグループ】
伴走者と一緒に走ることにに対する感動			【Bランナーが マッチング及び伴走を 通して得た経験】
A伴走クラブでランニングを継続している動機			
楽しくかつ楽に走るためのランニングスキルアップ			
マッチングに対するBランナーのメリット			
ベアランという意識			
事前マッチングによって練習会の相手が決まっている安心感		《事前マッチング》	【A伴走クラブの 定期練習会における マッチング方法と その変化】 (コアカテゴリー)
当日マッチングによる相手が決まらない不安感			
伴走者という財産			
自主マッチングにおけるBランナー自身の意味付けと実際の行動			
自主マッチングによるベアの固定化傾向に対する懸念			
伴走者が練習会に未なくなるという危機	〔自主マッチングにおける問題点〕		
伴走者に伴走依頼することに対する心理的に高いハードル		《自主マッチング》	
新しい伴走者を定着させる心がけ			
伴走依頼できるより多数の伴走者の保持・拡大	〔自主マッチングにおける課題〕		
新しい伴走者に対する最初の伴走依頼の重要性			
「シャッフル」という伴走教済・人脈拡大マッチングの実践			

次に、分析結果として、B ランナーの観点からみた B ランナーと伴走者におけるマッチング課題を明らかにするプロセス(図 2)を示す。これによると、マッチングが A 伴走クラブに所属する B ランナーに影響を及ぼすプロセスは、【B ランナーがマッチング及び伴走を通して得た経験】をベースとしている。その上に【A 伴走クラブの練習会におけるマッチング方法とその変化】がコアとなるカテゴリーとして構成される。これをコアカテゴリーとする理由は、マッチングの変遷がプロセスとして示されているからである。このコアカテゴリーに中位カテゴリーが 2 つ含まれる。一方の中位カテゴリー内に 2 つ、もう一方には 3 つ下位カテゴリーが含まれる。

コアカテゴリー【A 伴走クラブの練習会におけるマッチング方法とその変化】は、B ランナーがランニングを続けることに大きな影響を与えている。その理由は、伴走クラブで設立当初から行なわれていた《事前マッチング》、そして最近推進されている《自主マッチング》という 2 つの中位カテゴリーが存在するからである。この 2 つはマッチング方法における変化のプロセスを示す。《事前マッチング》とは、A 伴走クラブ会員である B ランナーと伴走者が E メール等で定期練習会の「参加表明」し、A 伴走クラブ代表者(=代表者)が練習会前日までにマッチングする方法である(星野, 2008)。一方で、《自主マッチング》とは、定期練習会までに B ランナーと伴走者が自主的に相手を探して見つけ、定期練習会に参加することである。現在《自主マッチング》を中心として定期練習会を実施している A 伴走クラブにおいて、B ランナーは様々な課題を感じとり、その解決方法を模索している。よって、それらは《自主マッチング》の下位カテゴリーとして、〔自主マッチングにおける問題点〕、そして〔自主マッチングにおける課題〕とした。

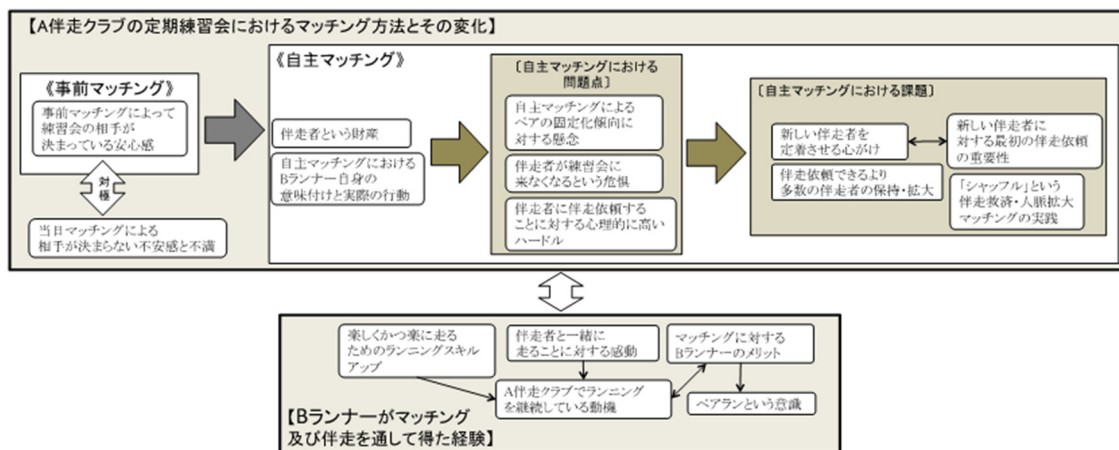


図2 視覚障がい者ランナー(=Bランナー)の観点からみた
Bランナーと伴走者におけるマッチング課題を明らかにするプロセス

本研究は結果と考察を同時に記述する。結果と考察は【カテゴリーグループ】ごとに分けて記述されている。データとの意味付けを深めるために逐語化されたBランナーのデータを引用しながら考察を行う。

2. Bランナーがマッチング及び伴走を通して得た経験

【Bランナーがマッチング及び伴走を通して得た経験】には、「伴走者さんがいるとこれだけ走れる」という感動、「予めマッチングしてもらっている」ことによる定期練習会に対する気持ちの高揚、「2人で同じもの(=ロープ)を持っているという感覚」、そしてBランナーにとっての伴走自体の「新鮮さ」がある。これらを伴走者と一緒に走ることに對する感動と概念化した。このBランナーの感動は、「その新鮮さ」によってA伴走クラブでランニングを継続している動機に影響している。

一方、別の概念である楽しく家に走るためのランニングスキルアップも、伴走者と一緒に走ることに對する感動と同様、A伴走クラブでランニングを継続している動機に影響を及ぼしている。Bランナーはランニング継続のために「伴走者が楽しく家に走れるような走り方を、我々は気をつけなくてはならない」とBランナー自身のランニングスキルアップを訴えている。伴走者はBランナーのその努力が「お互いが気持ちよく走れる」ことに繋がると考えている。また楽しく家に走るためのランニングスキルアップが、後述する自主マッチングに対する会員自身の意味付けと実際の行動として同時に影響を及ぼしている。

他方、マッチングに対するBランナーのメリットという概念は、A伴走クラブでランニングを継続している動機と相互に影響し合っている。Bランナーにとってのマッチングのメリットとは、「喜び」や「安心感」であり、「知っている者同士が、お互いに走れる」ことである。つまり、Bランナーが伴走者を信頼しているからこそ走ることができるのである。一方、「ランニングの話だけに限らず、(中略)(仕事に関する)プロフェッショナルの話のこだわりを聞く」など、Bランナーにとっての楽しみがメリットとされている側面もある。但し、このメリットはBランナーが伴走者とランニングに取り組んだ結果であって目的ではない。

さらにマッチングに対するBランナーのメリットが影響を及ぼす概念が、ペアランという意識である。Bランナーが「伴走を『ペアラン』として意識している」ことから、Bランナーと伴走者が「同じ土俵に立てて

同じように向き合える」ことは、両者が対等な関係であることを意味する。伴走者がペアランという意識を理解すると、Bランナーはランニングを「すごくやりやすくなる」。言い換えると、Bランナーと伴走者が「伴走」を「ペアラン」と捉え直すことによって、両者が一緒に走りやすい関係を築きやすくなるだろう。

3. A 伴走クラブの定期練習会におけるマッチング方法とその変化

《事前マッチング》が《自主マッチング》へと変化していくプロセスが、【A 伴走クラブのマッチング方法とその変化】としてグループカテゴリー化される。

(1) 事前マッチング

事前マッチングによって相手が決まっている安心感から考えられるように、「伴走者がいて、(定期練習会に)行けば安心して走れる」ことが《事前マッチング》の最大の意義である。それ故、Bランナーは「伴走が(事前に)決まっていなくて不安」と(中略)「落ち着かない」のである。さらに事前マッチングによって相手が決まっている安心感は、《自主マッチング》で後述するマッチングに対する B ランナーのメリットにも影響を及ぼしている。一方でその安心感とは対極的に、他クラブのマッチング方法に対して当日のマッチングによる相手が決まらない不安感と不満がある。それは、「その日に伴走者がいるかわからない」不安感と「行き当たりばったり」で伴走相手を決めるという不満を指す。よって、事前マッチングが A 伴走クラブで実施されているという事実は、Bランナーにとって非常に重要な意味を持つ。

だが近年 A 伴走クラブでは会員数が急激に増えて、代表者が《事前マッチング》することが負担となってきた。それを解決する方法が B ランナーと伴走者が互いに自主的に相手を探して定期練習会に参加するという《自主マッチング》である。そのために A 伴走クラブは《自主マッチング》に「2 年ほどかけてシフト(移行)してきた」。

(2) 自主マッチング

《自主マッチング》は、「(伴走者という)財産を自分の中にとっておく」つまり、伴走者を所有したという考えを B ランナーにもたらしめている。これを伴走者という財産として概念化した。伴走者という財産は、直接的にマッチングに対する B ランナーのメリットでもある。そして、「(B ランナーが)もっと自分で自覚的に伴走者を探すこと」、「自分で選ぶことが当たり前のように、先へ先へ(伴走の)先行依頼予約している」ことから、自主マッチングに対する B ランナー自身の意味付けと実際の行動が起こっている。これは A 伴走クラブ代表者による「(B ランナーが)1 人で(伴走者を)探せるようになる」という自主マッチングを促す考え方に基づいている。

(3) 自主マッチングにおける問題点

〔自主マッチングにおける問題点〕として、「良くも悪くも(伴走相手が)固定化してくるなど、約束して伴走する相手が決まってくる」という事態が起きている。B ランナーはそれを懸念している。つまり自主マッチングは、新しい伴走者と出会う機会をもたらしにくいというデメリットを潜めているといえる。このような問題を自主マッチングによるペアの固定化傾向に対する懸念と概念化した。

一方では、伴走者が練習会に来なくなるのではという B ランナーの危惧がある。B ランナーが抱える

危惧とは、「そういう人(＝体験に来てくれた人)を次に、また私が彼女彼ら(＝伴走者)にお願いしていかねば、(伴走者が定期練習会に)来なくなってしまうのではないか」という事実から伺える。その理由は、B ランナーが伴走者にどのように声かけし、伴走者に伴走を定着させるかが課題となっているからと考えられる。鈴木(2007)は、「伴走者を必要としているBランナー自身が、伴走を経験していない市民ランナーなど、Bランナーの伴走者になる可能性のある者に働きかけて自分たちの実態、練習会などのPRを積極的に行う必要がある」(p.4)ことを訴えている。これはBランナーから積極的な伴走者への声かけが伴走者の定着に繋がることを示唆している。

他方では、伴走者に伴走依頼に対する心理的に高いハードルが存在する。それはBランナーが「しゃべったことのない人(＝伴走者)には(伴走を)お願いしにくく」、「それ(＝伴走をお願いすること)は割とハードルが高いのではないか」と考えているケースである。その原因は、「走力のない人間にとっては、特に速いと噂があるような人(＝伴走者)には、(伴走を)頼みにくい」というように、Bランナーが伴走者との走力差にコンプレックスを感じていることである。この心理的なハードルを下げて、伴走をすることが難しいのではないかという不安を解消することも今後の課題の1つといえる。

(4) 自主マッチングにおける課題

自主マッチングには様々な問題点があり、その具体的な課題が以下4点挙げられる。

1点目は、新しい伴走者に対する最初の伴走依頼の重要性である。Bランナーは「新しい(＝伴走者がA伴走クラブに入会間もない)時が肝心である」と考えている。言い換えると、まだ伴走の定着化及び継続化がなされていない新人伴走者に、Bランナーが伴走者を必要としている状況を伝えることができる機会なのである。

2点目は、新しい伴走者を定着させる心がけである。Bランナーが「心がけているのは、なるべく私が伴走指導した方を次回にお願いするということ」である。Bランナーが継続的にランニングするには、伴走者が常に定期練習会に足を運びやすい環境をつくる必要がある。そのためには、Bランナーにとって伴走が常に必要だということを伴走者に理解してもらわなければならない。Bランナーは伴走者と連絡を取り伴走をお願いする時、実際にそのような努力を常に払っているのである。

3点目は、伴走依頼できるより多数の伴走者の保持・拡大である。Bランナーが走りたい日にいつでも走れるようにするには、「できるだけ多くの伴走の候補(者)をいかに持つか」が常に大きな課題となる。なぜなら、Bランナーが安定して走り続けるためには、伴走者が多い方がより柔軟な日程で伴走に対応できるからである。この課題を解決するために、「(Bランナーと伴走者が)お互いにそういうこと(＝積極的に連絡を取り合うこと)をしていくと、今まで組めなかった人(＝伴走者)と出会えたり、今まで会ったことのない人(＝伴走者)と走れたりする」可能性が出てくる。つまり、Bランナーが新しい伴走者と繋がろうとする積極的な意識があると、伴走者と走る目的や目標が少々異なっても互いに走る機会を増やせることに繋がる。

全国各地(東京・新潟・福島・福井・大阪・兵庫・愛知・沖縄)(ランニング学会編, 2001)では練習会も多くなり伴走者の数も増えてきている。だがBランナーが走りたい時に走れるほどの伴走者は集まっているとはいえない。定期的に走ってくれる伴走者の2倍の伴走者が望まれている(鈴木, 2012)という現状が未だ存在する。そのような現状を解決するためにも、定期練習会や日常的なランニングの場により

多くの伴走者の参加が求められている。

4点目は、これら3点の課題に対する取り組みとしての「シャッフル」という伴走救済・人脈拡大マッチングの実践である。A 伴走クラブのマッチングは事前に決定している自主マッチングが基本であるが、B ランナーが定期練習会に自主マッチングでペア参加できるとする伴走者をどうしても見つけられない場合、練習会場に設定されたエリア内で練習会当日にコース周回毎に不特定の伴走者とマッチングし、一緒にランニングできる「シャッフル」という方法を特別に設けている。この方法は他の伴走クラブの当日マッチングとは異なり、ランニング中に複数の伴走者が交代で伴走する形式をとり、走者間の交流をはかり今後の自主マッチングに繋げようとするものである。つまり「シャッフル」はB ランナーにとって「新しい伴走者を見つけて(伴走人脈の)幅を広げるにはとても役に立つ」のである。そういった意味からこの方法はB ランナーに大きな役割を2点もたらしている。1点目はB ランナー及び伴走者が自主マッチングで定期練習会にペア参加できなかった場合の救済措置的な役割、2点目は両者が現在有している人脈をさらに広げる役割である。

V. 結論

本研究において、B ランナーと伴走者のマッチングの課題が以下の4つにまとめられる。①伴走の定着化及び継続化がなされていない新人伴走者に、B ランナーが伴走者の必要性を伝える機会を作っていくこと。②B ランナーが継続的にランニングできるように日々伴走者の人脈を広げていくこと。③B ランナーが新人伴走者との人脈を広げようとする意識と行動が、両者の走る目的や目標が多少異なっても互いに一緒に走る機会を増やせるようになること。④定期練習会で取り入れられている「シャッフル」というマッチング方法に、これらの課題を解決する可能性が見出された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、B ランナーの観点からB ランナーと伴走者におけるマッチング課題を明らかにすることができた。

最後に本研究の今後の課題を整理すると、本研究ではB ランナーに着目した。だが、視覚的な支援を行う伴走者の観点からもマッチングにおける課題を明らかにする必要がある。B ランナーと伴走者の双方の観点からマッチングと伴走における今後の展望を示すことができれば、現在活動しているB ランナーと伴走者、もしくはランニングや伴走をこれから始めようとしているB ランナーと伴走者に幅広く伴走におけるマッチングを理解してもらえるようになるだろう。さらに、伴走クラブ代表者(運営する立場にいる者)の観点からも伴走におけるマッチングの現状、その問題、その具体的解決方法を示すことができれば、多角的に伴走におけるマッチングを捉え直すことができるのではないかと考える。

注1) マッチングに関する研究を概観すると、人と人の出会いを支援するソーシャルマッチングを扱った研究が多い(Loren et al., 2005; 濱崎ら, 2008; Richi et al., 2010; Slash et al., 2011;)。これらの研究を通して、①マッチングの成功率の向上、②ユーザーのプロフィールや属性から相手を紹介する方式を採用しているマッチングシステムの妥当性、③上記2点の特徴を考慮してプログラミングされたマッチングシステム提供が主に得られた知見である。一方で、ボランティアと現場ニー

ズとのマッチング研究がいくつか存在する。遠藤ら(2011)は、ボランティアのスキルや経験を4つに分類し、被災者のニーズ調査をチェックシートで行なっている。そしてボランティアを被災者のニーズに応じてマッチングする「災害ボランティア支援システム」を提案している。平松(2011)は、意思決定法である階層分析法を用いてボランティアと被災者ニーズの最適マッチングを試みている。その結果、ボランティアと被災者ニーズのマッチングを自動で行うアルゴリズムは、計算機実験における従来のポストイト方式と比べて複数ボランティアと被災者ニーズ間のマッチングに有効であることが確認されている。スポーツ分野においては、稲葉(2009)が「2002FIFA ワールドカップボランティアにおけるマッチングと活動評価」を研究し、「スポーツボランティアにおけるコーディネート仮説モデル」を検証している。そこでは、ボランティア活動に対する評価の実施はボランティアの成長を促し、より多くのボランティアの動機を満たすことにつながる可能性があることを示唆している。これらの研究では、被災者のニーズが検討されている点において、ボランティアと現場のニーズが対等に扱われている。これらの研究ではボランティアの意思決定項目が問題にされており、ボランティア側からの考察がなされている。

注2) データに基づいて概念を生成していくグラウンデッド・セオリー・アプローチは、内的視という「現象を内側から理解していくことができる」アプローチに特徴がある。木下は、その良さを残しつつ、概念生成から理論化までのプロセスをシンプルで明確なものに修正していった。具体的には、分析ワークシートを生成することで、「ヴァリエーション」欄に書かれたデータと概念との関係を十分に確認できるようにして、grounded on data の分析が着実にできる」ように工夫されている。

注3) 構造構成主義は、母集団に対する直線的な一般化は原理的に不可能であるという考えである。ここでは、「構造(モデル)」というのは現象をみる「視点」として機能する」と捉えている。それにより、西條は「一事例の研究であっても、そこで得られた視点(構造)を通して現象の見え方が変わるような、よりよい実践につながる構造(モデル)を構成することができれば、それは『視点提示型研究』として成功と考える」としている。そして「視点(構造)の射程を判断するための目安になる情報を与えるためには、類推が起きる時の条件を押さえておく必要がある」としている。それが「目的」、「直接的類似性」、「構造の類似性」といった「アナロジー(類推)の三原則」である。本研究においては、以上の視点から研究の限界と今後の課題について記している。

文献

- ・ アキレスインターナショナルジャパンホームページ(2016)
<http://achillesinternational.jp/event.html>. 2019年7月23日.
- ・ B.G.グレイザー・A.L.ストラウス, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳(1996)データ対話型理論の発見調査からいかに理論を生み出すか. 新曜社.
- ・ 遠藤大介, 稲永真一, 堀江真史, 杉田薫. (2011)災害情報デザインに関する研究 災害復興ボランティアの支援システムの考察. 情報処理学会研究報告 モバイルコンピューターとユビキタス通信, Vol.2011-MBL-58(8):1-7.
- ・ 藤田紀昭(2013)障害者スポーツの環境と可能性. 創文企画.
- ・ Flick, U. (2000) 'Episodic Interviewing,' in M.Bauer and G.Gaskell (eds.). Qualitative

- Research with Text, Image and Sound: A Practical Handbook: London, Sage, 75-92.
- ・濱崎雅弘・松尾豊・武田英明・西村拓一(2008)ソーシャルマッチングのための紹介支援システムについての考察. 知能と情報, 20(4):578-590.
 - ・平井達雄(2017)地域における障がい者スポーツの現状と課題:指導者の立場からー視覚障がい者ランナーを取り巻くランニング環境を例としてー. 鹿屋体育大学生涯スポーツ実践研究年報 2017:27-33.
 - ・平松達也(2010)SNS に基づく災害ボランティア活動支援システム. 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻 修士論文:1-83.
 - ・星野恭子(2008)伴走者たち 障害のあるランナーをささえる. 大日本図書.
 - ・星野恭子(2012)いっしょに走ろっ! 夢につながる、はじめの一步. 大日本図書.
 - ・稲葉慎太郎(2009)2002FIFA ワールドカップのボランティアにおけるマッチングと活動評価に関する研究. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2):93-102.
 - ・川端泰生(2008)東京マラソンの裏舞台ー東京を3万人が走るまでー. えい出版社.
 - ・木下康仁(2003)グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂.
 - ・香田泰子(2009)わが国における視覚障害者のスポーツ活動の現状と課題. 障害者スポーツ科学, 7(1):3-11.
 - ・香田泰子(2014)視覚障害者のスポーツにおける指導と支援. バイオメカニズム学会誌, 38(2):117-122.
 - ・Loren Terveen, David W McDonald (2005) Social Matching- A Framework and Research Agenda. ACM Transaction on Computer-Human Interaction, 12(3):401-434.
 - ・水野貴子・中村菜穂・服部淳子・岡田由香・山口佳子・松本博子(2002)小児がん患児の治療の安定段階における母親役割の変化と闘病体制維持プロセス(第1報). 日本小児看護学会誌 journal of Japanese Society of Child Health Nursing, 11(1):23-30.
 - ・水野貴子・中村菜穂・服部淳子・岡田由香・山口佳子・松本博子(2003):小児がん患児の治療の安定段階における母親役割の変化と闘病体制維持プロセス(第2報). 日本小児看護学会誌 journal of Japanese Society of Child Health Nursing, 12(1):8-15.
 - ・日本盲人マラソン協会ホームページ(2019)<http://www.jbma.or.jp/index.html> 2019年7月23日.
 - ・Richi Nayak, Meng Zhang, Lin Chen.(2010)A Social Matching System for an Online Dating Network- A Preliminary Study. 2010 IEEE International Conference on Data Mining Workshops, December 2010, University of Technology, Sydney, Sydney, NSW: 14-17.
 - ・ランニング学会編(2001):今日から始める 実践ランニング読本. 山海堂.
 - ・西條剛央(2007)ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM ベーシック編. 新曜社.
 - ・西條剛央(2008)ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM アドバンス編. 新曜社.
 - ・笹川スポーツ財団ホームページ(2018)スポーツライフ・データ ジョギング・ランニング実施率の推移. <https://www.ssf.or.jp/research/slldata/tabid/381/Default.aspx> 2019年7月23日

- Slah Alsaleh, Richi Nayak, Yue Xu and Lin Chen. (2011) Improving Matching Process in Social Network Using Implicit and Explicit user Information. Web Technologies and Applications, 13th Asia-Pacific Web Conference, Beijing, China, April 18-20, 6612: 313-320.
- 鈴木邦雄・新免哲朗・高橋隆子・長島孝雄・袴田悦子・千葉信野 (2005) 視覚障がい者ランナーと伴走者の現状分析ー左右の伴走位置実態及びその理由の調査ー. スポーツボランティア学研究, 1: 23-28.
- 鈴木邦雄 (2012) 伴走動機に関する考察 -伴走者の有無・伴走者の意識調査の結果からー. スポーツボランティア学研究, 3:35-40.
- 鈴木邦雄 (2013) 大会における伴走者に関する考察 -伴走者の有無・伴走者確保の現状調査の結果からー. スポーツボランティア学研究, 4:33-36.
- 鈴木裕久 (2006) 臨床心理研究のための質的方法概説. 創風社.
- 山口泰雄編 (2004) スポーツボランティアへの招待 新しいスポーツ分化の可能性. 第5章 障害者スポーツのボランティア (武隈晃) 世界思想社, 85-96.
- 湯川静信 (2009) 全国視覚障害者駅伝大会の 10 年間の歩みと意義. 第 30 回医療体育研究会/第 13 回アダプテッド体育・スポーツ学会 第 11 回合同大会 抄録集:26.